

岡村昭彦の会

1995. 5

NO. 4

第10回AKIHIKO忌

第一〇回「AKIHIKO」忌に

日本のあるいは世界のどんなところで起きた事件も世界あるいは地球というフィルターを通さずには理解できない状況です。当時、耳慣れない「国際報道写真家」という肩書きで、たくさんの仕事をした岡村昭彦が逝って一〇年。彼の仕事と現代社会の接点を考

えるのも、ありし日の感慨に浸るのも自由でありたいと思います。ここにいらっしやる皆さん一人一人の生き方と等身大の多様な思い、情緒が自在に自由にこの場を彩るとき、そこに世界史の現場を歩いた岡村昭彦がいると思います。

(加清 鍾)



“言語は思想を規定する”

新しい思想は新しい言葉で語らなくっちゃ。

池田千鶴子さんの
ハープ演奏

一九九五年三月二六日 お茶の水スクエア
当日参加者六六名

一四〇〇～一四三〇	司 会	中川 道夫
ハープ演奏	池田千鶴子	
あいさつ	加清 鍾	
一四三〇～一五三〇	講 演	浅井久仁臣
一五三〇～一六〇〇	講 演	木村 利人
一六〇〇～一六三〇	講 演	むのたけじ
一七〇〇～一九〇〇	講 演	むのたけじ

パーティ



“オカムラ”を追い続けた ウォーコレス・ポンデントの軌跡 浅井久仁臣

高二の時、岡村昭彦の『南ヴェトナム戦争
従軍記』に出会い「この道しかない」と心に
決め、その三学期にヒッチハイクで上京。彼
を探したのですが「彼が日本にいても思
っているの」と岩波の担当者に言われ、す
ぐと田舎へ帰りました。

大学を中退、当時、静岡で行われていた金
婚者の裁判の民衆弁護人を務めていた岡村さ
んを追って、静岡に行きました。顔を見るな
り「弟子はとらんよ」と一言。「ジャーナリ
ストになりたいんだったら、これからは英語
で記事を書けなければだめだよ」の言葉に、
イギリスへ行っただけです。

毎日新聞の小西昭之さんの下で働いている
時、小西さんと親しかった岡村さんがロン
ドンにやってきて再会、初めてまともに会話を
したのです。舌音の方が多かったのに、話し
た後の充実感は今でも覚えています。ベトナム
入国禁止の岡村さんはピアフ内戦を取材、
ロンドンに帰りがくると三人で飯を食い、話し、
ある時には私のアパートの床に寝て「君は若
くていいなあ」と羨ましそうに言いました。

「世界広しと言えども、漁師から借金して
戦場を取材しているジャーナリストは俺一人
だ」なんて威張っても追方はなかつたです。
「女房にメシ屋をやらせろよ」と言う岡村さ
んの言葉は、フリーランスで生きるジャーナ

リストの本音の部分だったのでしよう。

ロンドン以降、岡村さんとのつき合いはあ
りませんが、私が自分の中で岡村昭彦を目指
していたことは変わりません。その後APの
アジア総局に籍を置き、東京でロッキード番
をしていた時、「ペイルートで内戦があり、
タラールザータルというキャンプが、何カ月
も包囲され、ついに陥落」という話を聞き、
「三年半もAPにいてしまった」という深い
後悔と岡村さんから学んだことが自分の中で
生かされているのだろうかという疑問に、再
度、敢えてフリーランスの道を選んだのです。
それからレバノン内戦が一応の終結をみる九
一年までに三〇回近く入りました。

私の手法は初め活字とカメラでしたが、や
がて動く映像の魅力に惹かれていきました。
八年前、セバレットタイプのビデオが一体型
になった時、「これだ」と思い、「一記者一
カメラの時代になる」と予感。これは、常に
違った目でものを見るという岡村イズムから
発するものだったと確信しています。

当時のビデオは画像も悪く、それを持って
レバノンの戦場を歩いていると「何だ、その
おもちゃは」とバカにされると、「君達は今の
仕事を失うよ」と私は答えましたが、どうや
らこれが現実化しそうな勢いです。

レバノン内戦は八七年がピーク。キャンプ

あさい・くにおみ ジャーナリスト
寺門 国際関係学 中東・パレスチナ問
題 愛知県岡崎市生まれ 大学中退後、
大宅壮一東京マスコミ塾に入りフリーラ
ンサーを志す。'70-'73の在英中、岡村
昭彦氏と出会い、付き合いが始まる。'7
3-'76 AP (米) 通信記者。'76年フリ
ーランスとなり、主にTBSの契約特派
員としてレバノン内戦、イラン・イラク
戦争、湾岸戦争、旧ユーゴ内戦などを取
材してきた。阪神大震災後にボランティ
ア組織「ACT NOW」を結成、神戸
市兵庫区で活動中。著書に『レバノン内
戦従軍記』『パレスチナは戦争館』など。

第10回AKIHIKO忌



が次々と包囲、陥落、ペイルート北部のポ
ルジャルバラージュネは三カ月以上も包囲され、
二四時間砲撃を受け、兵糧攻めに遭い、飢餓
地獄。母親たちが乳幼児にガソリンを飲ませ
て自殺を図ったとか、宗教者が仲間の死体を
食べてもいいかとメッカの宗教指導者に許可
を乞うたとか……。

欧米のジャーナリストは誘拐人質事件に恐
れをなし、一人残らず消えてしまい、西ペイ
ルートで最大の戦場の後、その状況を撮影、
ある役割を果たした後、「キャンプに入らな
いか」と誘われたのです。その前夜、なぜか
私は三〇分ほど号泣しました。恐怖だったの
か何だったのか。少しして岡村の兄貴があ
のベトナムで解放村に入った時のことを思い、
スーッと心が落ち着いたのです。が、手遅
いで結局入れなかつたのですが……。

八八年、天安門事件の時は、世界のテレビ局の多くがビデオカメラを持っていました。なかなか取材許可が出ないために、紙袋やバッグに細工をしてビデオを持ち込み、フィルムを回していたのです。ビデオカメラがプロの手によって活躍した第一段階です。

第二段階は湾岸戦争。イラクはマスコミを十数社しか入れませんでした。私は人脈もあり入ることができました。そこで見たのもやはりビデオカメラ。そしてサラエボで活躍していたのもやはりビデオカメラでした。

最近テレビがビデオジャーナリストと称される若手を持ち上げていますが非常に問題です。そういう人たちは岡村さんがいうところの「シャッター以前」つまりカメラを向けている戦場の歴史も言葉さえ知らない不勉強な人たちがばかり。日本では大手のマスコミに入れないからフリーランスなのです。だから日本のフリーランスは展望が開けない、いやジャーナリズム全体がそういう状況です。

湾岸戦争の報道もわかりです。トマホークが飛び、スカッドミサイルが弾けるあの映像から、果たして視聴者が血の臭いを感じられるか、あの下で何万という人が亡くなっている事実を伝えられるのか。ベトナム戦争の報道とは明らかに違ってきています。それだけ情報操作が巧みになっていくともいえます。

現着の不勉強、センスのなさも大きな問題です。私は最近ジャーナリズムから遠ざかっています。一つのきっかけは、二年前のサラエボの取材です。あるテレビ局の特集の取材でワンクルーで入りました。イスラム政府軍はジャーナリストは一切入れないということでしたが、現場の指揮官や兵士に「うん一

といわせるほほえみの仕方は、岡村の元貴から学んでいますから。

「連れていってくれ」というアメリカの二人の記者を同行。死体の写真を撮らないかと導かれたそれは、セルビア人の男とモスレムの女が七年間恋しつづけ、ある夜、スパイナーの目を潜りぬけて反対側に行こうとして射殺された姿でした。二百メートル先は相手方のスパイナー。これは恐い。ビデオの画面が震えています。ファインダーを覗きながら目が熱くなりました。青年の手が彼女の肩に回っていたのです。

テレビ局に連絡すると「要りません」の一言。翌朝、一緒にいったカメラマンが大喜びで飛んできて「俺の撮った写真が世界の新聞のトップを飾っている」と。

もう一つの転機は一昨年の十一月、大腸癌の術後が悪く、主治医も首をかしげる状態。下痢がとまらない。年末に強引に帰宅、餅を食って回復し、すぐ退院。二月にはサラエボ、中東に取材に出かけるほどでしたが、それ以降発表していません。何かが違うという思いなのです。

あけて今年の一月十七日。あの阪神大震災。寝坊して九時半に起き、テレビをつけ「これは大変なことになるぞ」と感じました。しかしNHKは「死者三名、奥尻島の被害は――」

と実にのんびりした口調。十時前にNHKが芦屋上空からの空撮を映しましたが、数百戸の家が倒れていた。これを見れば誰でも状況が分かるのに、一度流しただけ。あとは高遠道路やポートアイランドを映すばかり。相変わらずNHKは「死者二十三名……」。「あの数百戸の家がつぶれている状況を流してく

れ、そうすれば現状が分かるから」とかけ合ったけど、一現場の判断です」の一言。

私は友人に話し、荷物をつくり、郵便局にほとんど運び込みました。現地に電話をかけたがつながらない。やっと三日目にある所につながったのですが、荷物は沢山届いているが手が無いという。人手を送ろうという、ボランティアなら三千人も来ていようと。人手を自分たちの指揮下に置かなければ不安なんです。そういう状況をマスコミは伝えない。現地のニーズが一切伝わってこない、お涙頂戴なものばかり。こんなの報道じゃない。

やっと物資のことを報道し始めたらそれも二週間で消えて、「震災後一カ月！」と、どつとまた報道が入った。「これは撤退したいんだな」というのが私の目に明らかでした。

ボランティアは貴重ですが、マスコミはチームを作って持ち上げているだけ、その先へつなぐ努力が何もなされていない。災害時のボランティアはまず人命救助、次に人的物的援助、そして自立再生。大きなグループも第二段階までほとんど撤退。もともと老人介護のシステムを整っていない地域の場合、急に自立しろといっても無理。そういう問題をマスコミはちょっとも報道しない。

取って私達は二月中旬から組織を組んでボランティアを送り込んでいますが、ここへきてボランティアが集まらない。緊急アピールを報道は取り上げてくれない。それが報道の現実です。

しかし私達は関東で同じことが起きた時、どう対処するかという所まで視野に入れたネットワーク作りに取り組んでいます。

類まれなストーリーテラー

「岡村さんが残していったこと、残そうとしたことを、いかに次の世代に引き継いでいかか私たちの務めだと思います」と呼びかけ人の大住敏子さんの言葉にもありますが、彼自身がやり残したことがあるならば、それを引き継いでいくのが使命だと思っています。彼から何を学ぶかについて、次の三点で話を進めていきます。

一、類まれなストーリーテラーとしての彼
二、一段上のオルガナイザーとしての彼
三、温かい手作りの思想を作り上げた彼
私と岡村さんの出合いは六五年七月のバンコックが初めてで、タイの日本人会での講演の後、ホテルのエレベーターの前でした。私は「南ヴェトナム戦争従軍記」を読み、体の中でも大きな人を想像していたので、思ったより小さな、しかし非常に精悍な顔付きの人という印象で、それは衝撃的とも言える出合いでした。それから三十年。

その後私はサイゴン大学で教えることになり、港のそばの日本大使館の階段の途中でバツタリ会って二言、三言、「あの時の君だね」と。七〇年、岡村さんは入国禁止が解けてサ

木村利人

イゴンに入ってきた時でした。我が家へ食事に誘うと、私にいろいろ質問をして、やって来たのですが、あの鋭い目で回りをぐるぐる見回しながら、静々と入ってきた様子を今でもはっきり覚えています。

これはフリーのジャーナリストとしての彼の生き方を表している。どこにどういう危険が潜んでいるかもしれないわけですから。私の家は軍のひとが個人的に経営しているアパートの上層階で、エレベーターも無かったんですが、そこに住んで最初に教えられたことは、車に乗る前に必ず下部を点検するということでした。ゲリラが間違っただけで爆弾を仕掛けることがあるわけで、現に政府の高官という職の人、車が爆発して死んでいきます。サイゴン全部が戦場なんです。

家内の手料理をいろいろ食べて、それから味をしめて度々やってくることになるんですが、どこで何をしているのかは分かりませんでした。入る時を窺っているようで、ずっと玩れて、外出禁止の一二時間になるとサツと帰っていく。後で分かったことですが、その頃、開放軍とのコンタクトのあった湯淺老人からベトナム語を習ったり、詩の勉強をしたり、朝早く歩き回ったりしていたようです。もう一つ印象に残っているのは、ヨチヨチ歩きの娘が、岡村さんに出そうと用意していた熱い紅茶に手を伸ばし、それを頭から浴びてしまったときのこと。「ギヤーツ」と悲鳴をあげた娘のただれた皮膚を見て、「すぐ戻るから」と言って自分の家に帰り、ヒルロイ

ドという火傷の薬を持って来てくれました。「これはサイゴンでは必需品だからね」と言っていて、自分が戦場で砲弾を浴びて火傷した時の大事な薬をサツと出してくれたんです。

さて、彼自身の生き方そのものがストーリーなんです。伝えたいこと、真理をより鮮明に浮かび上がらせるために彼は彼独特のストーリーを展開させた人なんです。

たとえば、バイオエシックスと彼の出合いは、私と彼のハーバードでの出合いが出発点なんです。だから七〇年ごろのサイゴンにいる時の彼にはそこまで見えてはいなかったのですが、ハーバードから見ると、サイゴンの本屋の店先にDNAのモデルの表紙があった、というストーリーがで上がる。そして、「その時、私はバイオエシックスを見つけていた」というふうに話が展開される。それは嘘ではなくて、確かにそこが発火点になっている。つまり、真理に肉薄するためのストーリーです。

彼の著作集にはこういう部分が結構ある。だから注意深く読む必要がありますが、こういう所は我々は学ばなければいけません。ここぞと思うところは百倍に、都合の悪いことは小さく小さく表現する。私のゼミの学生はアメリカ研修でこういうことも学ばんです。類まれなストーリーテラーである岡村昭彦から学びとる第一の点です。

第二に彼は人をその気にさせる不思議な才能の持ち主でした。朝日新聞で取り上げられた最初の自立した——は疑問ですが——ジ



「日本の現状を変えていかなければ」と考える人達、グループが日本全国あちこちに来ていた。看護婦さんや、いろいろです。それらが結び合って安曇野では日本の精神医療の歴史に残るような展開が実現しています。自分の頭の中にある、いろいろな人のつながりを大胆に展開させる。それぞれは会ったこともないのにお互いに情報はたくさん持っているんです。いろいろな人に働きかけ、その気にさせてやらせて、そしてそれらを大胆に結びつけ展開させる。一段上のオルグです。実はそういうつながりは私達も利用させてもらっています。私のゼミの学生は安曇野の病院に行き、そこで岡村さんから強い影響を受けておられる栗本藤基先生から教えを受けているんです。

七九年、ハーバードへ来た彼は、「まだ日本では取り上げられていないバイオエシックスの話を日本にきてやってくれ。自分はカバン持ちに徹して歩くから」と、彼の持っているいろいろなところに彼がオルグしたグループがあるんですが、それを全部私に紹介したんです。まあ、カバン持ちに徹するはずが、彼は

話に入ってきて、二人の言うことが違ってくる。すると聞いている人は「木村先生の言うことと岡村さんの言うことが違いますが」と言う。岡村さんは「違うからいいんです」なんて。真剣勝負なのに掛け合い漫才のようなそんなことをしながら、合間には、「なぜあんなことを言うんだ」「いや岡村さんこそあんなことを言っちゃダメよ」とやり合ったり。途中、舞阪に帰ると私に魚を煮てくれながら「金があればなあ。バイオエシックスをもっと展開できるのになあ」などとぼやいていましたよ。

若者が大好きで、「岡村昭彦が今生きていたらどうするだろうか」という痕跡を残しておきたい」と言っていました。岡村さんは普通の生き方、日常的な生活をしている人の前に立ち現れて、ある種のショックを与えて、岡村昭彦シンドロームを起こすんですね。何かしなくちゃいけないと思わせる。

「人間はどこから来てどこへ行くのか」という、鶴くことなき人間への興味と真理を追究し、敵を憎み、味方とともに前進し未来を切り開いていく姿勢を崩さなかった人です。

「新しい思想は新しい言葉で語ろう」と、私達はあえてバイオエシックスを「生命倫理」と訳すのはやめることにしたのですが、私が言うところのバイオエシックスの質的なものに共鳴して、あちこちに名前を出して話をし、つながりを作ってくれているんです。私の学生は今も彼から多くを学び続けています。そういう温かい手作りの人間関係、手作りの思想を作り上げていった人です。

ネガティブにもポジティブにいろいろな面があった人ですが、我々は以上の三点について、ぜひ考え学んでいきたいと思えます。



さむら・りひと 早稲田大学人間科学部教授 寺門 バイオエシックス(生命倫理) 比較法學 人権論 東京都生まれ
 '65年よりタイのチュラロンコン大学で東南アジア比較家族法の教鞭をとる。同年タイを訪問中の岡村昭彦氏と出会う。その後、サイゴン大学で教え、ベトナムの枯れ葉作戦と生薬派・生命の破壊体験を契機に生物医科学と人権問題に取り組み。ジュネーブ大学大学院教授としてWHOと共催で人権とバイオエシックス国際会議を開催するなど、'70年代から世界のバイオエシックスの第一人者として活躍。'80年からジョージタウン大学ケネディ倫理研究所国際バイオエシックス研究部長。一時帰国の度に岡村昭彦氏と共にバイオエシックス市民運動の形成のために協力。'87年に早稲田大学人間科学部教授を兼任。『いのちを考えるーバイオエシックスのすすめ』('87年) など著書論文多数。



まだ眠るなよ、岡村昭彦！

むのたけじ

三年前、ジャーナリスト会葬の總會で記念講演を頼まれた。テーマは「日本のジャーナリズムは死んだか」。「のん気なこと言ってる場合じゃない。とうにくたばってしまってる。だけどくたばったものを生き返らさなければ、日本の社会そのものが生き返ることができない」という発想でやらなければだめだ」と言っておきました。岡村さんには生きていて、いろいろな側面ではばんばん言葉をぶつけてもらいたかったです。「言語は思想を規定する」と、自分の歯で、牙でバリバリかじって吟味したうえでなければ言葉を受け入れて使ってはいけないと言っていたね。

今は人間の歴史が根底から変わっていく大きな時代の変革期。私は二〇歳の頃、明治維新前後のことをいっぱい勉強しました。何を考えるにも百年前に遡って考える習慣をつけた。「1968年 歩みだすための素材」の岡村さんとの対談集では、何を考えるにも近代の出発点である三百年前に遡ろう。ホーチミンさんの物さしは長い。少なくとも三百年の物さしで人類の歩みを見なければ、と話し合いました。

六百年の歴史のある村社会が、高度成長の波で次々と風化。もう百年、三百年の物さしでは、今進行しつつある社会状況の変化は理解できない、もっと長い物さしで人類の歴史を見ていかなければ、とやっていたところにあの関西の大震災。千三百年前、記録された日本の歴史には、M7の地震は無かったと安心しきっていたら、僅か十二秒の揺れで、十

六万棟が崩れ、五千四百人の九割の人がその時押しつぶされてしまった。いかに備えがなかったか。後で地震学者が、関西は活断層の上にあるから、そろそろ起きる頃だった、と。今は自然の子である人間の歴史にとつて、千年に一回のことが次々に起こりうる時代。

一万年ぶりくらいの人類の歴史の転換期なんです。一万年前にシリアの北部で農耕が起って、数千年で世界各地に広がり、日本でも青森で発見された三内丸山遺跡によれば、五千年前に稲穀が栽培されていたといえます。

それから今Eの文明文化というものがはびこって、戦争も起こる、権力の肥大化も起こる。まさにどんづまり。キリストは僅か二千年前、仏教は二千五百年前。ゲーテもシェイクスピアも、ソクラテスさえも通用しない。そういう今の時代を、ピンピンと感じているのは権力側。民衆がそれに気づかないようにあらゆる仕組みをマスコミがやっている。人間がバラバラになってしまっただけ、愛し合い支え合うべき人間が殺し合う、そういう状況を説明するのに「価値観の多様化」って。価値観って何なのか。それ一つを守るためには他の

一切を捨ててもかまわない、その報酬が腹の中にある時、はじめて価値観を語り得る。そういう日本人が一億二千万の中に何人いるのか、いないじゃないですか。

「価値観の多様化」とマスコミがいうと、民衆はそれを騙呑みにしている。バラバラであることの言い訳でしょ。私は満八十年生きてきて、今日ほど何がどうなるのか分かり易い時代はなかったです。原因があって結果がある。全て丸見えなのに、マスコミは「不透明の時代です」って。ためえ速が不勉強で分からないのをごまかして言っているだけ。

彼は本当に勤勉で努力家でした。準備をすっかりした人です。戦場の取材で何人かのカメラマンが死んだ時、「不注意だから死ぬんだ」と冷たいと思えることを言っていた。戦場へ入る前、死ぬかもしれないと夜更かしして酒を飲んで行く。だから弾に当たるといえばと言っていた。そして、岡村さんはといえれば普及から体を鍛えて、一週間前にはしっかりと音を整えておく。近代戦といっても、じつと音を聞いていて、右へ二メートルよけるか、左に三メートル飛ぶかが生死の別れ道。「俺はあれだけ厳しい従軍体験で、体にはかすり傷一つない」とえばっていましたね。

そして、「俺の話を農民に聞かせたい」というので三百人ほど集めた。ベトナムの枯葉



むの・たけじ ジャーナリスト
秋田県生まれ 本名・武野武治 '36
(昭11)年東京外国語学校(現・東京
外語大)スペイン語科を卒業して
報知新聞社に入社。社会部記者を経て
'40年朝日新聞社に入る。中国、
東南アジア特派員としてアジア問題
に関心を深めた。'45年8月15日ジャ
ーナリストとして戦争責任をとって
退社。'46年から名古屋で『中京新
聞』の編集を手伝い。'48年2月秋田
県横手市で週刊新聞『たいまつ』を
創刊、同紙主幹として地方の視点から
農村問題、教育問題を中心に評論
活動を行い、地方社会における民主
化、平和運動を続ける。『たいまつ』
は'78年780号で休刊。著書『たい
まつ十六年』('63年)。岡村昭彦氏
との共著『1968年-歩みだすた
めの素材』など。



作敵の話をしてから「あんた達、農薬なんて言っ、桑という言葉を使うから間違うんだ、あれには毒薬と書いてある。今日から農薬といわずに毒薬と言いなさいよ」と言ったから、農民ははらわたをえぐられたような気になって、熱気が立ちこめて興奮状態。

彼は、若いくせにやるべき努力をしないで怠けていると、立つ瀬がないくらいに叱りつけていた。そして自分は口先だけではなく、それを裏づける努力をしていた。日本資本主義の実態を暴かなければ、日本の過去も未来も見えてこないと言っ、『〇〇株式会社五十年史』などというバカでかい本を買い集めていた。創業何十年というところ、ついつい気を許して自慢げに本当のことを書くからその辺を（敵の手の内を）しっかりと読みとる——、そんなことやっていた物書きは日本中搜したって一人もいやしませんよ。そうしなければやっぱり生きた言葉も生まれてこないし、世の中も見えてこない。彼もいろいろ欠点や過ちはあった。でもそれを越えてなお、ピカピ



カ輝くものを持っていった人だったですね。

岡村さんは民衆の一人として、まず言葉から管理統制してくる権力を心から憎んで、駁おうとする意志を貫いた人だと思えます。

ある時、「むのさん、あんたに忠告がある」と真顔で言ってきた。「あんたみたいな人は、いずれ法廷に引っぱり出されるに違いないが、日本の裁判というのは、狂戯でもったいぶっていて、国家の権威とか天皇の権威を感じさせるようにマジメムードでやるが、あんたは妙にマジメだから、うっかりするとまんまとその手にはまるよ。調べられそうになったら数日前からおならをいっばい溜めておいて、名前を呼ばれたら、まず「ポーン」とおならをして、裁判官のお茶を、俺も飲みたいと言っ、ガブツと飲んでムードを全部壊してしまふんだよ」とっね。「権力と対峙する」なんて言うのと悲憤感が違って、ことに私らの世代の間は暗い感じになっちゃうんだけれども、その辺も岡村さんは違っていましたね。

筑豊に上野英信さんという岡村さんの兄貴のような親友がいます。炭鉱労働者があの地獄のような労働の中で搾取されながら、それでもなお、底抜けに明るい、人間らしい喜びの生活風俗や、歌やいろいろなものを作り出している。そういうものの記録者となったのが上野さんですが、そこに岡村さんは惹かれて、何度も通うんですね。

私はしばらく気づかなかったんですが、そういう民衆の明るさ、底力というものは、農民の中にもちゃんとあって、受け継がれていたんです。徳川、正味二百七十年間の農民一揆は約三千件掘り起こされていますが、黒船来航直前の岩手南部三陸一帯の百姓一揆は最大規模のものでしたが、その記録を読むと、

我々が今想像するのは全然違う。一揆と言えはムシロ樹立で、奇白い顔して——首謀者は死罰だから——と思うがそうではなく、白い大きな旗を立てて、そこに小さな○を置いて、「百姓はこまる」なんてユーモアがある。先頭には村中の染織をかき集めてオーケストラを奏でて、お蔭の大きな女も子供も、老人もみんな中に入れて、周りを屈強な若者が守って村ぐるみで戦った、本当の戦いだったね。

だから四十何項目の要求を突きつけて八十パーセントの要求を通したもんね。春闘を見てご覧なさい。軒並みベテチャーとやられてしまっ。無理ないね。労働組合の連中は、トップに経営能力が無くって「合理化」と言っ、首を斬ろうとしてくるのに、「不当な首切り反対！」と言わずに「合理化反対」だっ。権力の言葉はちゃんと言い換えなくちゃいけない。進歩派、革新、ヒューマニストと言われる人が一番信用できない。なんと不真面目で不勉強か。結局、学習熱心な保守派と言われる人たちが、良かれ悪しかれ、今日まで日本民族を支えてきた背骨です。

多種多様な輝きを持った岡村さんでしたが、各々が岡村さんに学びながら、自分の思う側面から追っかけていけばいい。ただ、「何が岡村昭彦をして岡村昭彦たらしめたのか」ということだけはきちんと押さえて。そうすれば岡村昭彦の真骨頂はここだという点で、共通の理解が進み、共通の認識がでてくる。その時はじめて岡村さんは「俺、眠るよ」とって安心して眠るだろうと思います。

そういう日が来るまでは、今しばらくはあのかのするどいきらきらした目で、四方八方睨みながら居てもらっ、我々をはがんばっっていかなければならないと思っています。

もう、お読みになりましたか。
 韓国の雑誌に翻訳掲載されることになった！
 『シャッター以前』NO.2

シャッター以前 2

岡村昭彦研究

ニュージャーナリストの位相 ● 米沢慧
 岡村昭彦の写真を読む ● 中川道夫
 世界史のしっぽと戦略村 ● 吉田敏浩
 松澤和正 小野彰子 小西美宏
 橋本 龍 池上正治 宮島安世



シャッター以前 2 目次

次世代からのメッセージ

- 1 ニュー・ジャーナリストの位相 ● 米沢慧
- 2 岡村昭彦の写真を読む ● 中川道夫
- 3 世界史のしっぽと戦略村 ● 吉田敏浩
- 4 岡村昭彦とバイオエシックス ● 松澤和
- 5 昭彦の幼い頃 ● 小野彰子
- 6 〈独舞路〉 岡村昭彦を見たとき ● 小西美宏
- 7 「遠い戦争、見えない戦争」との自白
- 8 戦時 飢餓の中のピアフラ 独立前
- 9 岡村昭彦の中国 ● 池上正治
- 10 「ベトナム」とは何か
- 11 「解放」とは何かの旅 ● 宮島
- 12 没後の岡村昭彦 —— 山口洋

定価1800円(送料込み)

★刊行されて一カ月。まだ公にならなかった評判はありません。この間、マスコミなどへの献本をはじめ、これはと思う人、つまり関心がある人、もつてくれるからしれない何人かの人に手渡したときの率直な感想はなかなかのものでした。いわく「岡村昭彦の会なんてまだ、やっているんですか？」「本気で勉強会やっていたんですか？」「岡村昭彦って、ケンキョーするぐらい大物なんですか？」「キヤパよりきわどい仕事をした人、というけどいつごろの戦争なんですか？」「岡村昭彦？ 聞いたことありません。まさに岡村昭彦没後一〇年の現実。まさに岡村

で生きている岡村昭彦の現在とむきあい、それを引き継ぐということ。そんな試みとききやかな成果が、次世代からのメッセージとして『シャッター以前』2号になったのです。

たとえば中川道夫の「岡村昭彦の写真を読む」は、報道写真の岡村昭彦から入報道Vを抜いてはじめて入写真Vとして読まれ論じられたものです。また、吉田敏浩の「世界史のしっぽと戦略村」はフォト・ジャーナリスト岡村昭彦の世界認識の方法をめぐりに実践したもので、これは韓国の雑誌「ハンギョレ21」(あるいは月刊「中央」)にも掲載されることになりました。

去る四月二二日の「岡村昭彦を読む会」は執筆者を囲んでの充実した合評会で、基調報告を嚆として時間いっぱい発言があいつぎました。会員の方の感想もぜひお聞かせください。

★そしてお願いです。「シャッター以前」2号は全国の一部主要書店の店頭においてありますが、まだ購入されていない会員の方はぜひ事務局までお申し込みください。また、知り合いの方にもお勧めして資金回収のためにご協力をお願いいたします。(米沢 慧)

事務局だより

- 1 第十回「AKIHIKO」のピデオ(一〇分、一本)をつくりました。送料込み二千円です。
 - 2 「岡村昭彦の会」の通信費(千円)未納の方、ご面倒でも振り込んでください。
 - 3 「シャッター以前」の申し込み、ピデオ注文、通信費納入「読む会」への入会申し込み会費三千円等には、同封の振替用紙をご利用ください。なお、口座番号は〇〇一七〇一六一六一一五二二三、加入者名「岡村昭彦の会」ですので、郵便局にある用紙でも結構です。
 - 4 「シャッター以前2」の感想、会への意見、注文、ご希望等送りください。なお皆さんの近くの市区図書館で、「シャッター以前」NO1及びNO2を購入するよう推薦してください。
 - 5 前回もお知らせしましたが、「読む会」の松澤和正さんの「報道写真家 岡村昭彦」戦前からホスピスまで」が、NOVA出版から発売(定価二千六百円)されました。購入希望者は、最寄りの書店または直接松澤さんまで(田無市谷戸町2-19-14カクタス田無マシオン204 電話0424-22216456)お申し込みください。
 - 6 事務局が大住方より戸田方に変更になりました。住所TEL FAX番号等ご注意ください。
- 新事務局 〒一三三 東京都江戸川区西小岩五十一-二七 戸田方
 TEL&FAX 03-3365718380